

V バラエティーが成り立つ公共空間

1. テレビ本来の姿としてのバラエティー

気がつきました？

前の章の最後の方で話題にしたのは、昔のバラエティーはよかったです、などということではない。そんなことでは全然なくて、バラエティーの送り手と受け手の関係の話である。マス・コミュニケーションとは何か、という問題である。

昔の視聴者は、いまのように新聞のラテ欄にテレビ局の電話番号など書いてなかつたから、番組のあれこれについて、簡単に局に電話したりなどしなかつた。もちろん、まだBPOの視聴者対応の窓口などカゲもカタチもなかつた。それでながら、テレビと、とりわけバラエティ一番組と活発なやりとりをしていた。

それは、電話やファックスやメールがなくても成り立つ、バラエティーと視聴者のあいだの意思疎通である。送り手がギャグやコントやドタバタで、あるいはオシャレなトークやジョークに包んで送ったメッセージ、けっこうキツい毒の入ったメッセージを、受け手はたしかに受け取って、面白がったり、驚いたり、気持ちを高ぶらせたりしていた。「ウケる」とは、このコミュニケーションの成立のことであった。

*

しかし、ここで見落としてならないことは、これが送り手と受け手、1対1のあいだで完結する、閉じたコミュニケーションではなかつた、ということである。

視聴者一人ひとりの背後には当時の世の中の仕組みがあつて、そこには理不尽な権威やうざったい社会通念、封建的な常識や意味を失った秩序等々がぎっしり詰まっていた。王様は雲の上にいただけでなく、その意を汲んだ種々雑多な家来や手下が俗な世間のあちこちにいたということである。

おそらく誰もが、そういうものに従つて暮らしていれば、波風も立たず、楽なことを知つていながら、「なんだかなー」とか、「そればっかりでも面白くないなア」くらいのことは考えていたにちがいない。

ここが人間の不思議というか、一筋縄ではいかないところである。どういうわけか人間は、ひとつところには留まっていない動物であるらしい。

バラエティーは、直接的には視聴者に向かって語つたり、演じたりしながら、間接的にはそのうしろにある世の中の仕組みと、そこに付随するもろもろの権威や通念を揶揄し、笑い飛ばし、おちょくつていた。視聴者に、視聴者一人ひとりを取り巻いている現実の表層を引き剥がしてみせ、見てくれとはちがう現実の相貌、変わり種の現実を見せていたということでもある。

当然、おちょくられた側からは、「子供に悪影響を与える」「公序良俗に反する」等々の反発もあった。反発も批判もコミュニケーションの一種であるから、当時のバラ

エティーは、こうして視聴者ばかりか世の中とも渡り合う二重三重のコミュニケーションの上に成り立っていたと言うことができる。

*

番組が送りつ放し（＝放送？まさか！）ではなく、不特定多数のマスの反応を引き起こし、送り手と受け手と世の中のあいだであれこれとコミュニケーションが成立すること、それこそマス・コミュニケーションの本来的な姿だった。

ここは、しっかり押さえておきたい。

テレビは、なかんずくバラエティーは、送り手と受け手で成り立っているが、受け手には、視聴者と世の中の2つがあって、この3つがくんずほぐれつ絡み合って、ひとつのコミュニケーション空間を作り出してきたこと。これがテレビが作った公共空間、テレビの公共性というものだった。

前の方で誰かが、「やっちゃんいけないことが面白く」「世の中に衝撃を与える快感」と言っていた。これである。テレビの前の視聴者をワクワク、ドキドキさせ、ワーワー、キヤーキヤー言わせるだけでは十分ではない。世の中に衝撃を与え、揺さぶってこそ、バラエティーはバラエティーの毒を発揮し、制作人も出演者も大きな顔ができるというものだった。

とすれば、いまバラエティーは、テレビと視聴者と世の中とのあいだにどんなコミュニケーション空間を築いているだろうか。

2. いま、視聴者の現実が見えているか

「C」は4歳から12歳の子供、「T」は13歳から19歳のティーンエイジャー、「F (M) 1」は20歳から34歳の女性（男性）、「F (M) 2」は35歳から49歳の女性（男性）、「F (M) 3」は50歳以上の女性（男性）……。

放送界には、マーケティング理論を応用した視聴者層の分類がある。制作者は頭のなかで放送時間帯とターゲットとする年齢層の生活時間を組み合わせ、その視聴者層の関心を惹きつけるにはどうすればよいか、と知恵を絞る。とくに番組の訴求力を企業に売り込むことで収入を得ている民放には、ここは思案のしどころとなる。

しかし、いまどきの視聴者を世代と性別を大雑把にクロスさせて分類するだけで、その特性や嗜好の傾向性がわかるなどとは、放送関係者自身が半信半疑にちがいない。

早い話、成人年齢から30代半ばまでのF 1、M 1である。

この層には、家族、学校、地域中心だった生活から世の中に出で、やっと自分の人生を始めたばかりの若者もいれば、子育てまっさかりの親になったり、もしかしたらもう相手と別れて、「20歳のころはよかったア」などと、早々に「マイ古き良き時代」を懐かしんでいる風の人もいる。と思えば、大学院や留学やボランティアの勉強や活動で忙しい人、オタク的趣味やファッショニや恋愛に夢中の人、リストラや倒産でそれどころではない人もいる。兄弟姉妹や親戚とのあいだのもめ事で気の休まらない人、早くも親の介護で大変な人だっているかもしれない。

これらを一括りにして、特性なり傾向性を引き出すって、どうやってやるのだろう。素人目にはまるで手品かアクロバットにしか見えないが、そこが現代マーケティング理論の妙ということなのだろう。

どうせなら血液型性格判断も加味したらいいのに、なーんて。

あ、本気にしないでねっ。

ここは、よーく考えてください。

詳しくは、民放連「放送基準」をご覧あれ。

*

要は、同じ年齢層でも、視聴者は種々さまざま。どころか、一人のなかで、3つも4つものものが並立したり、争ったりしているのがいまの視聴者である。

おまけに、前にも言ったようにこのごろは、気を滅入らせる閉塞感が四方八方から押し寄せてくる。経済の先詰まり感、政治の停滞感、行政の不透明感、国際情勢の不安定感、地域の尻すぼみ感、家庭の孤立感……。

これらはみんな、あらゆる年齢層に覆いかぶさってくる。こんなことばかり気にしていても何も始まらないが、厄介なのはどれもこれも、我が身の責任も多少は関わっているように感じられて、でも、自分だけではどうしようもできないことばかりということ。

鬱陶しい。落ち着かない。先が見えない。世の中、何が起きてもおかしくないし、何でもありかもしれないが……だからこそ、せめて最低限の、いちばん基本になるとこただけは、自分なりにしっかりとおきたい——。

思い通りにいかない世の中でクビをすくめて暮らしていくも、それだからこそ、大事にすべきことの2つ3つはいい加減なところで妥協せず、ちゃんとしておきたい——。

視聴者のあいだに、このような漠然とした思いが湧き上がっていいだらうか？

委員会が、たくさんの視聴者意見に目を通し、その意味するところを検討するなかで気づいたのは、これである。

かつての視聴者を取り巻いていた旧習・旧弊はずいぶん少なくなったかわりに、世の中に根を張った生活信条があるわけでもない。あるのは、あちこちから、ときには地球の裏側や近隣の国々からも押し寄せてくる巨大な力に揺さぶられているという実感。王様の姿は見えないのに、その乱暴な影響力だけはある。それに正面から立ち向



かう方法を見つけ出せないまま、ぎすぎす、いらいらする世間の空気。そんななかでは、せめて「自分なり」に「生きることの基本」を決めるしかない……。

いわば感触のようなものではあるが、多くの視聴者意見からは、そういう人々の思いの存在が手応えとして、確実に伝わってくる。

それが、バラエティーが「嫌われる」瞬間のなかに、「生きることの基本を粗末に扱うこと」として括って示した視聴者意見の数々である。

ここからは、「バラエティーは不安な世の中で一生懸命生きている視聴者のこと、知らんぷりを決め込んでいるんじゃないか」と言いたげな声が聞こえてくる。バラエティーはこうした視聴者とのあいだにコミュニケーションの回路を開いているか。一人ひとりの視聴者の関心事に真正面から切り込み、世の中を揺さぶるような公共空間を築いているだろうか。

*

委員会は、バラエティー番組制作者が視聴者一人ひとりの現実にしつかり目を向けていただきたいと考える。そこから新しいバラエティーを作り上げてほしい、と期待する。

むろん私たちも、憂き世のことを忘れさせてくれるひたすらナンセンスなバラエティーをときには見たいと思う。また、制作者が視聴率にこだわることも、視聴者分類を意識することも大事だと思っている。

だが、そこからだけでは浮かび上がってこない視聴者個々のナマの気持ち。いったいいま、この世の中で、視聴者は日々、何を感じ、どんなことを思いながら暮らしているか。そういう切実な気持ちや思いを発生させているものの正体、人々の日常を条件付けているものの正体は何なのか。それこそ昔の旧習・旧弊にとてかわって、人々をがんじがらめにし、息苦しい思いをさせているもののはずである。

上に記したような視聴者の思いの先に、人間と世の中に関わる新しい考え方、新しい価値観や倫理、新しい生活様式が開けるかどうかはわからない。人間はなかなかじつとしていないから、そのうちにこれらとは縁もゆかりもない、とんでもない見方や世界観を作り出さないとも限らない。

だが、バラエティーと民主主義が二人三脚、古い権威や社会通念、旧習や旧弊を一掃したあとで、フラットになった世界、一人ひとりがばらばらに生きている世の中で、「自分なり」に発せられる意見の他に、新しい考え方や価値観や倫理の内容と方向性を知る手がありはあるだろうか。

おそらくはたぶん、このちょっと先に、これからバラエティーが視聴者とのあいだに共感・共振の窓を開き、世の中を揺さぶるような堂々としたコミュニケーション空間を作るステージがある。そう考えるのは、誇大妄想だろうか？

冒頭で言った、「これ」の話である。

いくら生きにくいといつても、私たちはクビを引っ込め、びくびくしてばかりはいられない。嗤笑、爆笑、大笑いがないなんて、だいたいろくな世の中じゃない。笑えること、愉しめることが少ないと、バラエティーがそこに堂々と切り込んで、息苦しい世の中をひっくり返してほしい。

それこそが、委員会の期待なのである。

突然ですが、次は最終章です。

3. これまでのあらすじ

最終章。

これまでのあらすじ、です。

……DはADとPのあいだにいて、将来を嘱望されていた。TやF1、M1の仕事もできるし、F2やM3をやらせてもそつがない。だが、クールでタフなDにも、誰にも知られたくないトラウマがあった。それがときどき疼いて、彼を引っ込み思案にさせていた。何でもこなせるが、顔のないD、それが彼だった。トラウマは、

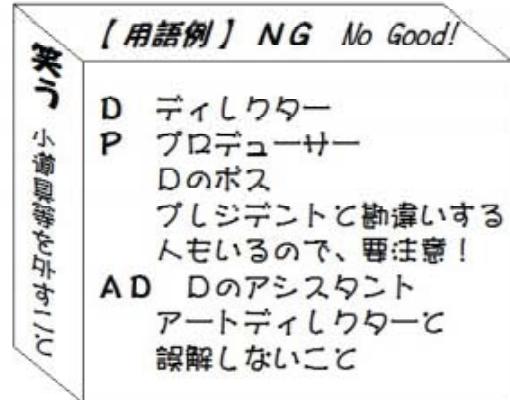
出生にまつわる謎にあった。

……Dが幼少のころ、婆さんが言った。「おまえはね、どんぶらこ、どんぶらこと川を流れてきた桃から生まれたんだよ」。ウッソー、マジーイ？ 子供のころは、その程度でした。だが、いまや赤ん坊がどうやって生まれるかくらいは知っている年齢だ。オレの本当の両親は誰なのか、どこにいるのか。あの爺さん、婆さんは何者だったんだ。考えれば考えるほど、わからなくなる。

……婆さんは毎日、川へ洗濯に、爺さんは山へ柴刈りにいった。今風に言えば、山奥の限界集落。オレはキビ団子をエサに、犬と猿とキジと仲良くなつて遊んだ。いまは仕事仲間がたくさんいるにしても、あの鬼ヶ島の鬼退治以来、本当に心を許せる友だちといえば、やっぱり彼らだった。

……ただ、連中はあの一件で味を占めてから、やたら騒動好きになってしまった。今日も、犬は「敵はコスト削減で攻めてきてますっ」、猿は「嵐だーっ。コンプライアンス強化の嵐がきたぞーっ」、キジは「B P Oの委員会に気をつけた方がいいかもよ」と口々に言った。オレをけしかけ、また鬼退治にいこう、という魂胆なのだ。

……こいつらに騒がれると、トラウマが疼く。赤ん坊は川に流すし、見え透いたウソは言うし、人間はわけがわからない。それよりTだ、M1だ、F2だ、9.7%だ、13.6%だと、数字や記号を相手にしている方がどんなに気が楽か。数字や記号は



何も主張しないし、嫌味も言わない。オレの出生の秘密をさぐるような真似もしない。

……誰かが「つまんねえよ」と言っていた。「下ネタとか、イジメや差別とか、仲間内のバカ騒ぎとか。あなたのバラエティーは、少しセコいんじゃありませんか。おまけに、手の内がバレバレだから、目も当てられない。このごろの視聴者は何につけて、専門家やマニアや事情通ですからね、みんな見抜かれてます。全然、ノれないんです。あなたも少し考えてくれないと困るんですけど」とか、なんとか。



……Dは内心、ムッとした。あれは絶対、ただのバカ騒ぎやイジメじゃなかった。鬼どもが暴れまわり、近隣の村々も困り果てていた。婆さんからその話を聞いて、オレは許しちゃおけない、征伐してやると思った。あの鬼退治は、世のため人のためだった。それをバカ騒ぎや罰ゲームみたいに言われたくない。Dが「そうだったよな」と言うと、犬と猿とキジが、パチパチパチッと拍手した。

……しかし、このときクールなDは、出生の秘密を調べたときに読んだ文献のことは黙っていた。これについては昔々の著名著述家もおおいに関心をそそられたようで、福澤諭吉は「あの話には所有権の概念がない。鬼ヶ島にあった宝物は、鬼たちの所有物である。鬼を成敗して奪ったというのは、単なる泥棒行為にすぎない」という意味のことを書いていた。芥川龍之介はもっと意地悪だった。「鬼はもともと飲めや歌えやが好きな平和愛好家だった。だから、ウソはつくわ、欲は深いわ、殺し合うわの人間界を避けて、絶海の孤島に暮らしていた。その鬼ヶ島を、家来3匹に加勢させて襲い、殺し、奪い、陵辱したのは露骨な侵略行為と言うべきである」。Dは、近くの村の女たちも鬼たちにはひどい目に遭っていたじゃないか、と反論しようとしたが、芥川は先まわりして、「女人の言うところをことごとく真実と認めるとは、世間知らずも甚だしい」と、にべもない。もう少しDに好意的なヤング派の解釈等もあったが、ここはあらすじだから、省略。

……Dはショックだった。だが、言われてみれば、鬼どもが近隣の村々を荒らしまわったといつても、婆さんから聞いただけで、自分の目でたしかめたわけではない。だいたい鬼たちが、芥川の言うように絶海の孤島からあんな山奥まで出張ってきたというのも、ちょっと辻褄の合わないところがある。途中にいくらでも裕福な町や村が

あつたはずだし、わざわざ辺鄙な村までやってきて、荒らしまわっても、得することなんかなかったはず。あの婆さんの言うことを信じたオレが、ウブだったのか……。

……「もうひとつあるでしょ、あれが」と誰かが言い、Dの気を引くためか、ゴホンッと咳払いをした。Dにもわかつっていた。桃はもともと高地の果樹。婆さんがオレを拾ったのも、それが事実だとして、川の上流だった。たしかにあそこはとんでもない山奥で、絶海の鬼ヶ島までは遠かった。しかし、Dはあの長かった道中を、犬と猿とキジにキビ団子をわけてやるシーンだけでつないでしまった。素材Vがなかつたり、番組の尺が足りなくなったとき、みんなやっていることだが、あれではオレたちが本当に鬼ヶ島まで行ったのか、本当に鬼退治をしたのか、と疑われた場合、少々説得力に欠けることは否めない。

……キジがPCの上で羽を広げ、「言われ放しじゃ悔しいよ」と言った。犬はMAの卓に足を突っ張り、「数字は取ってる。見てくれる人は、見てくれているんだよ。文句あるかっ」と吠え立てた。やばい。社内で騒動を起こすのはまずい。Dは気が気ではなかった。

……さっきから突っかかってくる誰かが「ふん」と鼻を鳴らした。「わかってないなあ。バラエティーは、テレビの前の視聴者にワーワー、キャーキャー言わせるだけでは仕事の半分しかやったことにならないって言いませんでした？ 世の中と渡り合って初めて、テレビにしか作れない公共空間が作れるんだと。何がいまの視聴者を笑わせ、驚かせて、そのうしろにある世の中まで巻き込んで振り動かす毒になるのか。そこを考えてもらいたい、と言っているんです」

……聞きつけたのは、ST内を駆けまわっていた猿だった。「うるせー。そっちこそ、わかつてねーな。このごろはTもF1もM1も、身近な話題でしか盛り上がり上がらねーんだよ。MとFの2と3だって、たいして変わんねー。オレらの仕事はそういう連中が相手なのー。わきからゴチャゴチャ言わねーでくんねーかな」

……誰かもしつこかった。「そういう視聴者を作ったのも、最近のテレビじゃありませんか。テレビは世の中に話題を提供し、みんながそれを共有し、共振させること



F female 女性	
M	male 男性
PC	パソコンのこと
MA	Multi Audio 効果音・ナレーション 等の音声編集作業 和製英語
ST	スタジオのこと

で、世の中をまとめてきた大事なメディアじゃないですか。そのテレビが身のまわりのネタしか取り上げなかつたら、みんなの関心もそこ止まりになつてしまふ。だから、ちまちまドメスチックなんて言われちゃうんです。そんなこと、わかりきつたことでしょう。テレビにはそのくらいの影響力があるって、先輩から教わらなかつたんですか」とか、どうとか。

……キジは「聞いてないもーん」とさえずり、犬は「知らんっワンッ」とそっぽを向き、猿も「そんな古いこたー、わっかんねー」とうつむいた。Dは焦った。劣勢は覆いがたかった。やがてDは、3匹が自分を見つめていることに気がついた。物心ついたころからの友だち、いつも助けてくれた彼らの目が、じっと見ている。何かしなくてはいけない。何か動かなくては……。

……そのとき、タフなDはヒラメいた。逃げていてはダメだ。オレのトラウマ、オレ自身の出生の謎に正面から立ち向かうのだ。あの爺さん、婆さんはもうあの世だが、鬼というヤツはいつの世、いつの時代にもいる。あいつらなら何か知っているかもしれない。連中が裏にまわって、いまも世の中を震え上がらせているとしたら、ただじやおかない。正体を暴いて、こらしめてやる。長い道中だ。道々、いろんな人間にも出くわすはずだ。FとMの1と2と3とかじやない、生身の、手強い連中かもしれないが、じっくり世の中ってやつを知るいい機会になるだろう。いや、そうしなければ、オレ自身の人生が、ご都合主義を寄せ集めた安直なバラエティーみたいになつちまう。

……Dはデスクから起ち上がり、「鬼だつ。もう一度、鬼ヶ島へ行くぞー。みんな、ついてこい！」と大声を張り上げた。彼のまわりで犬と猿とキジが、キャッキャッキャッと跳んだり跳ねたりし始めた。

と、これが前回までのお話でした。

さて、いよいよ最終回ですっ。

